

## 引用ルールや表記の統一について

可能な限り以下のルールに沿って作成。とはいえできる限りでOKです。

- ・横書きで統一(英語を引用する可能性があるため)

- ・日本語タイトル→『』(二重カッコ) 例：『星のせいにして』

- ・原語タイトル→イタリック(斜体) 例：*The Pull of the Stars*

- ・作中からの引用→「」(引用ページ数)

例：「どうしてか、まだこの会話を終わらせたくない」(p171)とジュリアは思う。

\*強調のための「」と区別する＝引用であることをはっきりさせるために、()内にページ数を入れる

\*強調は圏点(傍点)でも可能だが、こちらはここぞというときに取っておくのがよいかと

例：すでに将来の死(産)が決定づけられている胎児としてのブライディの～

\*そのほか各種カッコ(〈〉、《》、[] など)で強調してもよいが、複数同時に使う場合はそれぞれに固有の役割を持たせる

- ・ほかの本からの引用(日本語の場合)→「」(『タイトル』引用ページ数)

例：「ある人物を象徴的に洗い清めなければ、雨の中を歩かせればよろしい」(『大学教授のように小説を読む方法』p104)とフォスターは指摘しているが、ならば『星のせいにして』における冒頭の雨にはいったいどのような意図があったのだろうか。

- ・ほかの本からの引用(原語の場合)→“ ”(イタリックのタイトル, 引用ページ数)

例：『星のせいにして』における鉤括弧なしの文体はいわゆる「意識の流れ(Stream of consciousness)」との接続性も考えられる。例えばヴァージニア・ウルフの“*Yes she thought, laying down her brush in extreme fatigue, I have had my vision.*”(To the Lighthouse, p194)という有名なフレーズと比較すると～

\*引用時のタイトルは初出時のみで2回目以降はページ数だけでもOK(長い批評の場合、引用箇所が離れてるとどの本からかわかりにくくなるので再記してもよい)

- ・長い引用の場合(1パラグラフ丸々とか)→改行&インデント(段落下げ)

例

～ということも考えられるが、

Quickly, as if she were recalled by something over there, she turned to her canvas. There it was--her picture. Yes, with all its greens and blues, its lines running up and across, its attempt at something. It would be hung in the attics, she thought; it would be destroyed. But what did that matter? she asked herself, taking up her brush again. She looked at the steps; they were empty; she looked at her canvas; it was blurred. With a sudden intensity, as if she saw it clear for a second, she drew a line there, in the centre. It was done; it was finished. Yes, she thought, laying down her brush in extreme fatigue, I have had my vision.(p194)

とあるように、ここでの～

\*改行&インデントをした場合は「」や“ ”は不要

・『星のせいにして』以外から引用した場合はラストに文献一覧を載せる。表記方法は以下の例に沿う。

日本の本→著作者『タイトル』(、訳者)、出版社、刊行年

原著→著作者, タイトル(イタリック), 出版社, 刊行年.

例

ヴァージニア・ウルフ『灯台へ』、御輿哲也訳、岩波文庫、2004年

Virginia Woolf, *To the Lighthouse*, Alma Classics, 2015.

トーマス・C・フォスター『大学教授のように小説を読む方法 増補新版』、矢倉尚子訳、白水社、2019年